

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席 主
研究員8 まちづくり再生の
キーワード(続)

そしてまた、筆者が節目ごとに述べてきた「コンパクト化」という言葉の引用については、決して「ミニ東京」を造ろうとするものではない。

コンパクト化という基本的な言葉の引用は、縮小する地方財政力の将来の方向性を考慮した時に、一定枠の都市機能を拠点に集約する必要性は、健全で持続可能な地方政治を維持していく上で避けて通ることのできない課題だからである。

地方都市におけるコンパクト化は、人口減少下にあっても、分散した拠点の一元化を図

ること、より質の高いサービス効率よく地域住民が享受されることが前提であり、結果として、さらにその成果に加えてインフラコストの軽減が図られるものでなくてはならない。

また、それらの拠点を道路や鉄道などのネットワークを駆使し、強い連携を保つことで利便性をもたらし、域内の人口流出を防ぐとするのがねらいでもある。

そして、そこに磨かれた個性(地域の特性)が混じり合い、交流することで地域文化の多様性が生まれ、魅力と輝きあふれるまちづくりが誘導できるのである。

したがって、筆者は大都市のような殺伐とした空間造形は一切求めていない。地域におけるまちづくりは、先に述べたように心の通うものを造形していくことが前提である。

「歩ける道」はあくまでハードの手法(技の造形)であり、「歩いてみたい道」はあくまでソフト(心の造形)がなし得るものである。

既に、全国各地の地方都市では、失われつつあるまちの活力再生事業が行われつつあ

る。それら地方都市の共通のキーワードは、「賢く縮むための戦略」でなければならない。

地方都市は総じて人口は減少していき、高齢化は進行していく。中には、その再生のために多額の補助金を使つてまちを生まれ変わらせようとする自治体もあれば、あくまで伝統的な町屋を残しながら、市民中心の費用でそれを蘇らせようとしている地域もある。

いずれのやり方が是非かと問う必要はないが、共通して言えることは、ハードばかりが優先される再生手段はさらなる「都市のガラパゴス化」を招く危険性を孕(はら)むものであり、将来もっと大きな空洞化現象を引き起こしかねないことを肝に命じておきたい。(続)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長